

## 中東・イスラーム研究から何を学ぶか―特集によせて

三浦 徹

本号は、お茶大でイスラーム史を担当してきた私の定年退職を記念する「中東・イスラーム研究特集」号となっている。一九九〇年にお茶大に着任してから二九年間にわたり、一年生の入門的な講義から、学部の演習（ゼミ）、大学院（博士前期、後期）の演習を担当し、卒業論文七〇本、修士論文二二本、博士論文七本の主査（主任指導）を務めた。学生が探究したいテーマで論文をかく、という方針にしていたので、論文の地域・時代・テーマは多種多様であり、こちらがわか勉強をしたり、教えられたりすることも多かった。今回の特集では、お茶大大学院で学んだ二二名の研究者（修士生）が論文・史料訳・研究ノートを寄稿している。特集の話があったときに、実証的な論文もよいが、「研究ノート」というスタイルで研究の展望（アジェンダ）を書くことを提案した。それは、会費を払って本誌を購読している千名近くの卒業生（読史会会員）の方々に中東・イスラーム研究の一端をみていただく機会にしたいと考えたからである。学位論文（学士、修士、博士）の指導と審査は、中国史担当教員（窪添慶文先生、岸本美緒先生）とペアで行い、いつも鋭いコメントをいただいた。今回の特集にあたっては、長く研究仲間であった岸本先生に寄稿をお願いした。教育・研究・家事と多忙なかで寄稿いただいた方々に改めて御礼を申し上げたい。

提出された原稿を最初により、コメントをするという「編集者」の役をつとめるうちに、自分がなにも発言しないのは申し訳ないという気がしてきた。また授業では、イスラーム史から何が学べるかを考えよう、といってきた手前、この問いに対する自分なりの解答を提示しておく責任もあると考えた。以下は、私自身の歴史学や中東・イスラーム研究への関

心の変遷を備忘録風に綴った答案である。

(1) 歴史(学)に関心をもったのは、大学の教養課程のころ。明治維新や自由民権運動についてである。とくに色川大吉の『明治精神史』増補版(黄河書房、一九六八)や『明治の文化』(岩波書店、一九七〇)における民衆憲法の創造に感動した。秩父事件とその敗北にも関心をもち、秩父困民党の足跡をたどった(当時一緒に旅した仲間はグローバル企業や裁判所のトップになっている)。鹿野政直『明治の思想』(筑摩書房、一九六四)が述べる、人はなにを語るかではなく、いかに語るかによって人を信頼するのだということ、また、歴史研究の意味は、「未発の契機」を探ることにあるということ、このふたつは、人々と共同作業をするなかで自分の指針となった。

(2) 大学の専門課程は、法や経済や思想といった専門に分化するのではなく、トータルに人間と社会を捉えたいという思いから、ドイツ地域研究のコースを選んだ。頭にあつた問いは、なぜ人びとは天皇制(ファシズム)を受け入れたのか、というものであり、それは、空洞化する戦後民主主義という容れ物への疑問ともつながっていた。ドイツを選んだのは、単純にはドイツ語を選択していたこと、同様の道をたどったドイツを通して、日本を相対化できないか、と考えたからである。

(3) 中東・イスラームに初めて触れたのは、大学三年の秋。高校では中国史しか習わず、イスラームの「イ」もマムルークという存在も知らなかった。一九七三年の一〇月、第四次中東戦争におけるアラブ諸国の石油戦略によって、オイルショックが日本を襲った。ドイツ地域研究の学科において、ユダヤ人問題に関心があつたため、世界史上差別をうけてきたユダヤ人が建国したイスラエルと、同様に植民地支配の犠牲者であるアラブ諸国がなぜ戦っているのかという素朴な疑問を抱いた。折しも、板垣雄三先生の「アラブ近代史」という授業があり、門外漢にもかかわらず受講した。授業は、「アラブとはなにか」という根本的な問いからはじまった。アラブとは(そしてイスラームもまた)相関的な概念であり、それは自他を峻別することで成立する「ヨーロッパ(型)近代」の対極にあり、後者の二分法的世界観が内部にかか

える矛盾（ユダヤ人問題）の輸出が帝国主義（植民地主義）であり、パレスティナ問題を産み出している。現代の問題が、原初的原理的な問題に立ちかえって解かれる快感から、俄然興味をもち、四年次には早稲田大で開講されるアラビア語の授業にもぐりこんだ。板垣雄三編『アラブの解放』（平凡社、一九七四）は、資料集でありながら、資料の選択にこのようなパラダイムが示されている。

（4）卒業論文は、ドイツ語で書くことが条件であり、ワイマール時代の社会文化をテーマとした（Die politische und geistige Grundlage der weimarer Zeit）。ドイツ革命（とくにレーテ運動）のユートピアの瓦解から、新即物主義やバウハウス運動など日常に立ちかえる思想や営みに関心（期待）をよせた（アイデアのもととは、ピーター・ゲイ『ワイマール文化』みすず書房、一九七〇）。終章は、ヨーロッパ近代の宿命（合理性の追求による魂の喪失）を自覚したマックス・ウェーバーの「職業としての政治」のある文句（Ich kann nicht anders, hier sehe ich、余所にはいけません、ここに立ちます）であった。自分勝手な思い込みだけで書いたものゆえに、書き終えてもつと勉強したいと思った。就職先は決まっていたが、大学院を受験し、面接（口述）で学問の基本的な作法を知らないことをあっさり見抜かれて不合格となった。

（5）平凡社に就職し、三年間の雑誌編集（別冊太陽シリーズ）の勤務ののち、百科事典の編集部に移り、そこで再び、歴史学の面白さに出会った。百科事典は平凡社の看板商品であったが、三〇年ぶりに全面改訂の新版を編集するにあたって、学問分野別の編集（項目選定）にかえて、エリア（地域）をユニットにする新システムが採られた。事典の各項目（固有名詞であれ普通名詞であれ）を地域・社会の全体像（コンテクスト）のなかで記述する、という狙いであった。ひとつひとつの事項（の説明）は、いわば入口であり、そこで完結するのではなく、つぎつぎと関連する項目を引き進むことで、知の体系をつくる（あるいは事典のなかに知の体系が内在する）という考え方であった。私は、ドイツ、中東のほか、北欧、東欧、中央アジア、の五つのエリアを担当した。中東の編集委員会では、板垣先生のほか、嶋田襄平、佐藤次高、永田雄三、坂本勉、ドイツでは阿部謹也、良知力、北欧では熊野聡、東欧では萩原直、中央アジアでは間野英二、

ヨーロッパ委員会では二宮宏之、川北稔、といった先生方にお世話になった。阿部謹也『中世を旅する人びと』と網野善彦『無縁・苦界・楽』が相次いで平凡社から刊行され（一九七八年）、社会史の潮流が話題になったころである。偉い先生方を「さん」づけで呼び、読みかじった知識で議論をしていた。若気のいたりとはいえず、生意気でぜいたくな時間を過ごした。このときに初めて、学術雑誌の論文を読むことを覚え、史料のなかにこそ答えがある、ということを知った。

(6) 事典の副産物として、日本イスラム協会編『イスラム事典』を企画し一九八二年に刊行、その二年後平凡社を退職し、大学院（東洋史）に進学した。八二五の項目、一二〇〇枚の原稿を読むなかで、内在的な関心が芽生え、それを自分の眼で史料にあたって考えたい、そのためには、史料の読み方を習う必要があるというのが動機だった。大学院受験には二回失敗し、ようやく三度目に合格した。最初に不合格になったとき、佐藤次高先生が、「一年かけて史料をよんで論文を書きなさい」といって、イブン・トゥールーン（一五四三年没）の『サーリヒーヤの歴史』の校訂本を貸してくださった。アラビア語の初級は自学自習していたとはいえ、史料をよむのは初めてで一頁読むのに数時間かかった。大学院受験にあたって卒業論文にかえて提出した「サーリヒーヤのマドラサとウラマー社会」は、最初の学術論文（『東洋学報』一九八七）となり、九四年には英語で刊行した。

(7) 大学院進学時の研究テーマは「都市（社会）」、以後変わっていない。動機の第一は、対象を都市に限定することで、人間の生きる、織りなす世界の全体（像）を描きたいということ。自分自身が都市で育ち、根をもたないことが関係していた。やがて、都市は、空間（ハード）と社会（ソフト）からなりたっており、両者の関係が都市の変容（発展と衰退）をつくりだす、と考えるようになった（『イスラームの都市世界』山川出版社、一九九七）。

(8) 修士論文「マムルーク朝末期の都市社会―ダマスカスを中心に」は、「末期の」社会が主題であった。官僚や軍人のジャマア（党派、家門）が支配の核となり、これに対抗し、街区ではズール（任侠無頼）が台頭する。マムルーク、ウラマー、民衆といった階層が解体し、非正統的な集団に結集するという（近世への）変化として位置付けた。ラピダスの

都市社会論（『中世後期のムスリム都市』一九六七）に刺激をうけつつ、賄賂とズールをよりポジティブな事象として扱うことで、末期を単なる無秩序・混乱ではなく、新しい秩序の生成期であると考えた。賄賂や上納金をつかってでも、生き延びようとする人々に、人間臭い共感をもったといってもよいだろう。提出した時点では、「やりとげた」と思ったが（手書き四〇〇字五〇〇枚）、生まれたばかりの子どもの泣き声をききながら夢中で書いたものゆえに、専門的な観点からどのような評価をうけるのが不安だった。史学会東洋史部会での発表（一九八六年）は十数人の聴衆だった。日本東学会大会発表（「マムルーク朝末期の賄賂と行政」一九八七年）では「賄賂」を前面にだしたところ、会場から強い手応えがあった。修士論文は『史学雑誌』に発表（一九八九年）、改訂版をシカゴ大学の *Mamluk Studies Review* の日本研究者特集号に寄稿した（二〇〇六年）。森本芳樹先生（ヨーロッパ史、故人）は、イスラーム都市研究について「コスモロジー、ネットワーク、アウトロー」という三つのキーワードを示し（『歴史学研究』六〇七号、一九九〇）、とくに後二者は三浦さんの研究イメージです、とおっしゃったが、自分ではそのことに気づいていなかった。二〇〇〇年代になって、欧米でもマムルーク朝時代の賄賂や悪を主題とする論文や著書が刊行され、私の関連論文も引用数が増えている。

（9）一九八八年から重点領域研究「比較の手法によるイスラームの都市性に関する総合的研究」（研究代表者板垣雄三）が開始され、「権力構造と都市」という班にはいり、加藤博さん（社会経済史）からは研究方法の刺激をうけ、また班研究会に提出した「マムルーク朝の権力構図」はその後もよく利用している（図一）。二年目の全体集会のセッション「異なる地域の都市の比較は可能か」の報告者をつとめ、その延長で高澤紀恵さん（フランス史）、山本英史さん（中国史）ら他地域の研究者と定期的な勉強会をもった。また、羽田正・私市正年・林佳世子・小松久男さんと共著『イスラーム都市研究・歴史と展望』（東京大学出版会、一九九二）を編集・刊行した。きっかけは、先の全体集会の総合討論が言い放しの空中戦になったとき、嶋田襄平先生がせて欧米の研究史はフォローせよ、と叱咤したことにある。執筆期間は約一年、パソコンはあってもOPACもほとんど稼働していない時期のこと、ひたすら論文を読んで、文献カードを起こ

し、図書館で現物を探してコピーするという作業をくり返した。九〇年一二月、予稿をもちよって開催した松山での合評会で、岸本さんが超絶なコメント（メタ原理とはなにか）を突きつけた。地域・時代による都市の違いとともに、観点の違いも浮かび上がり、羽田さんが序論「イスラーム都市論の解体」を、私が終章「都市研究の再構築にむけて」を書いた。いずれも五名のメンバーの討議にもとづくものである。終章では、都市研究の方向として、「参照系としての都市」という提言をした。「都市の空間」「都市の集団」ではなく、「空間としての都市」「集合としての都市」を問うことで、都市から出発するオープンな研究の展開を期待した。都市史研究者の伊藤毅さんは、「方法としての都市」ということですね、と評した。当該書は、九四年に増補・英語版が刊行され、海外でも書評に取り上げられ、欧米の図書館にも広く所蔵されている。（『都市研究をこえて』『創文』四一〇号、一九九五）。

(10) 「イスラーム地域研究」(創成的基礎研究、研究代表者佐藤次高、一九九七―二〇〇二)の後半に、岸本さんと文化人類学者の関本照夫さんとともに「比較史の可能性」という研究グループを立ち上げた。三年間で計九回の研究会を行い、普遍的なテーマをアジアから比較すること、単なる異同の発見ではなく、異同の理由を問うこと(原理的比較)を旗印に掲げた。その成果として『比較史のアジア所有・契約・市場・公正』(東京大学出版会、二〇〇四)を刊行し、「序 原理的比較の試み」では、マルク・ブロックとシダー・スコチポルの比較史論をベースに、図2を作成した。ある地域Aにおいて現象Yの原因がXであるとしても、それだけでは真の原因とはいえない。別の地域Bで同様の現象Yの原因がZであるとすれば(あるいは原因Xがあっても現象Yが起きてないとなれば)、より高次のレベルの原因(原理)があることになるからである。すなわち、地域間の諸現象の比較を通じて、さまざまな現象の因果関係を、より広くより深いレベルで探索・検討できるのである。これはイスラームに要因を帰しがちな中東研究への自戒であり、また、特定の地域や時代のみ限定して実証的であると主張する歴史研究への批判でもあった。中国社会とイスラーム社会との間には意外なほどの共通性がある。絶対的な創造主(天、アッラー)とそこから権威を賦与された君主(皇帝、カリフ)、バランス

としての知識人・官僚層（士大夫、ウラマー）、私的所有権の契約と市場による取引の三つである。他方、契約（および裁判）という場で、人を結びつける（制する）装置として、ヨーロッパでは「法の普遍性」、中東・イスラーム世界では「第三者」、中国では「一致した合意」を提示した。

(11) このころから、いくつかの比較研究のプロジェクトに誘いをうけた。寺田浩明さん（中国法）からは法制史学会の研究會に招かれ、日本やヨーロッパ法の研究者と議論を交わした（『法が生まれるとき』創文社、二〇〇八）。渡辺浩一さん（日本近世都市史）が主宰する、国文学研究資料館を拠点とする「歴史的アーカイブズの多国籍比較に関する研究」（二〇〇四―〇七）では、日本、中国、韓国、ヨーロッパ（英仏）、中東（トルコ）を五つの軸とし、五年間にわたって、五つの地域でシンポジウムを開催した。国内外の多数の研究者と出会い、その研究や資料に直に触れることで、アーカイブズ（文書資料）を焦点とし、その作成や保存の主体（国家、中間団体、個人）や書式といった目に見える形から、三者の関係をあぶりだす、という手法を学んだ（『中近世アーカイブズの多国籍比較』岩田書院、二〇〇九の小文）。二〇一一年にはフランス（エクサンプロヴァンス）の中東研究者ランディ・ドゥギエムさんが主宰するCNRRSの国際共同研究「ワクフ」に、（公財）東洋文庫として参加し、科研費（ワクフ・寄進の比較研究）も採択され、二〇一五年には東洋文庫で国際シンポジウム「ワクフの比較研究―東方から」を開催し、その成果を英語の論集として刊行した。比較歴史学のオムニバス授業「比較社会史」でも、寄進をテーマとし、新井由紀夫・神田由築・大藪海の諸氏に登壇いただいた。比較とは、発見の道具であり、図3のような地域間比較のマトリクスを書いては直している。

(12) 二〇〇五年に、文教育学部の四つの学科の共通コースとして「グローバル文化学環」（グロ文）が設置され、私はその専任教員となり、比較歴史学は兼任となった。新設科目の「グローバル・ヒストリー」「地域研究方法論」を担当し、比較歴史学コースの「アジア史研究法」と演習は、グロ文の「イスラーム社会文化論」と合同授業となった。中東・イスラームの教育・研究には、歴史のような通時的な軸と地域研究のような共時的な軸の双方が必要なので、恰好の場が提供

されたといってもよい。グロ文の入門授業（「グローバル文化学総論」）では、高校生や大学生のイスラーム認識のアンケート調査をもとに、ステレオタイプ化したイスラーム認識の問題を導入とした。高校の世界史教科書の編集に長く携わってきたため、欧米やアジア諸国での歴史教科書の比較にも関心を抱いた。○五年春に米国のグローバル学のコースをもつ八大学をまわって授業を参観し、それに刺激をうけ、授業のやり方を「双方向 interactive」に変えた。「問いかけ」を軸とし、毎回の授業後に課題提出（コメント）をもとめ、次の授業時の最初に振り返りを行った。プロジェクト（スライド）も常用した。下をむいてプリントを読むのではなく、前をむいて教材や教員と対話する授業に変えた。スライドは、画像や図表が使いやすいという利点だけでなく、点や線ではなく全体（面）を意識するという点にすぐれ、それが電子式紙芝居の最大の利点である。また、文理融合リベラルアーツの「ジェンダー」系列で「宗教文化とジェンダー」を隔年で開講し、イスラーム世界の女性・ジェンダーを切り口として、日本との関係や比較の観点をいれ、ジェンダーそのものの、イスラーム世界そのものの問題を考えるという構成をとった。開講当初は三〇名程度だったが、やがて朝一番の授業でも百名をこえる人気科目?となった（「イスラーム世界はなにを語るか——双方向的なイスラーム理解」『日本歴史学協会年報』第三一号、二〇一六）。

(13) こうしてふたたび、教育の場で地域研究を担当し、また二〇一二年からNIHU「イスラーム地域研究」プログラムが開始され、「地域（研究）とは何か」という問いに答える立場にたたされた。地域研究は、学際的総合的研究をめざすものであるが、ハミルトン・ギブが一九六三年に示した「東洋学（人文学）と社会科学との結婚」、すなわち特定地域についてのファーストハンドの知識と社会科学の分析手法の双方を兼ね備えた研究（者）という要請はいままお課題であるが、現在は、これに「自然・環境」についての知見や理工系の技術を加える必要がある。日本の中東研究では、歴史研究者が約三割をしめ、近年は、現代の政治・経済・社会の研究が増加しているが、文学・芸術や自然…技術の研究が手薄であることは否めない（『日本中東学会年報』一九一、二一一、二八—二参照）。他方、イスラーム社会論という点で



は、ヨーロッパ社会の「制度・組織」に對置して、個人間の「ネットワーク」が注目されてきた。しかし、それは中東やイスラームの専売特許ではなく、どの社会にも存在し、それゆえに結合のあり方（質）を問う必要がある（二宮宏之編『結び合うかたち』山川出版社、一九九五の拙稿）。近年岸本さんは、費孝通の社会類型論を援用し、中国社会の人的結合では「人倫」が基盤となり、社会は個人を中心点とする波紋となると述べる。図4は、ヨーロッパ、中東・イスラーム、中国の三つの人的結合の違い（団体型、人倫型、契約型）に着目して私が作図したもので、社会類型（イメージ）としては、ブロック、ネットワーク、ウェブといえる（渡辺浩一編『比較近世都市』勉誠出版、二〇一五所収）。中東・イスラームの人的結合では、上下の差序よりも対等・水平が基調となる。ここで注意すべきことは、社会類型そのものを固定化するのではなく、中国の事象をイスラームの類型を使ってクロスして解釈することによって、事象や論題を多元的な位相で分析する道具として用いることである。

(14) さいに、歴史研究とはなにか、他の学問と比べ独自の意義をもつのか、という問いを考えてみよう。これについては、『歴史学研究』（九五二号、二〇一六）に寄稿した文を引用する。「かつてある理系の研究者から、歴史学には法則があるのか？と尋ねられたことがある。歴史学には独自の法則はなく、法学、経済学、政治学、社会学などの諸法則が社会の生きた局面でどのように機能するかを総合的に討究する学（場、実験室）といえる。これは生物学が、ミクロレベルでは物理学や化学の法則に則りながら、生命体として統合される局面を扱っていることにも通じる。法や経済などの諸法則が現実平面においてどのように働くのかを、具体的な過去の事例をつうじて学ぶことは、社会で働き、暮らすうえでの生きた力となる」。ある理系の研究者とは、郷通子前学長であり、これをスライドにした図5は授業でよく用いている。

(15) 歴史研究、地域研究、比較研究についての足跡と方法を語ってきたわけだが、これらを用いて、実際にどのような研究（成果）をしたのか？と問われると、まだ途上です、と答えざるをえない。二〇一五年に刊行した研究書（*Dynamism*

*in the Urban Society of Damascus: The Sālihiyya Quarter from the Twelfth to the Twentieth Centuries*, Leiden: Brill）は、ダマスカ

スのサーリヒーヤ街区の形成と衰退の過程を一二世紀から二〇世紀初頭までたどったものであるが、その結論としてつぎのように述べた。「この世にはアッラー以外に絶対的な正義は存在しない。あらゆる人間と行為は、社会的なコンテクストで判断され、そこでは、非合法的な正義も合法的な不正義も存在する。このようなダイナミズム（動的関係）こそが、人的関係しだいで、都市社会を、発展にも、衰退にも、カオスにも導くのである」。この結語は、サーリヒーヤというひとつの街区の歴史から導いた仮説としては、針小棒大の批判を免れないが、このような見通しをもちえたのは、お茶の水女子大学という学際的で自由な場ですごすことができたおかげである。今回の特集の論考は、個々人の自発性と持続性こそが多様な研究を支えていることを示している。そしてここまで読んでくださった方が、そういうことだったのかと大学の授業や教育を再評価していただけたら望外の幸せである。

本号には、特集とともに、私の「最後の研究室便り」と履歴書・業績リストを掲載する予定であった。しかし、室伏きみ子現学長が昨年一月の学長選考で再任され、私ももう二年間、理事・副学長（教育担当）を務めることになった。このため、両稿は、理事を退職しお茶大を去るときに掲載することとなる。勝手ながら、以上の変更をお許しただきたい。

図1 マムルーク体制

「マムルークは行政を通じてではなく、あらゆる生死にかかわる社会的な絆を手中にすることによって都市を支配した。」(Ira M. Lapidus, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, 1967)

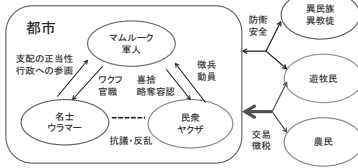


図2 イスラーム地域の比較研究

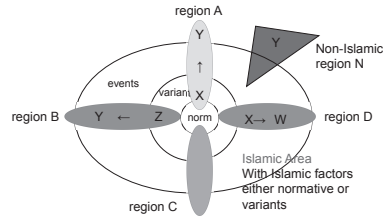
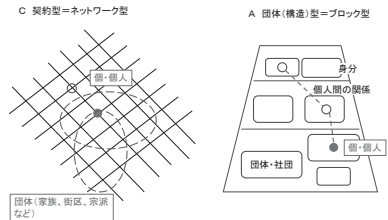


図3 地域間比較:発見の道具として

	中東 (ダマスカス)	中国	ヨーロッパ	日本
寄付 (永代不動産)	ワクフ	族産、寺田、祠堂、普堂 類	私有教会 死守財産 mortmain	寄進(荘園)
ヤクザ	都市(の街区) 暴力(無籍)/ 任侠(両義性)	任侠/無籍	Outlaw/ Social bandit	やくざ、ならずもの、俠客
契約と裁判	個人の所有権 第三者(証人、調停者)、公平	田面・田底 典(賃) 情理	排他的所有権 一義的な法	理非 大開裁き
都市社会 (ハードとソフト)	ブロッケ状の 基礎面 ネットワーク アドル(公正)と スルム(不正)	都城・鎮(地域の 中心・一部) 網(ウェブ) 人物(差序)	団体的 (都市、社団)	面と線 局所(無縁、 城下町)

図4 個と社会の類型



B 差序(人倫)型=ウェブ型

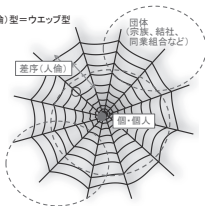


図5 歴史学の 実験室

